

資本主義のからくり

特 114

289

山川均 著

僚友社 發行



始



特114  
289



資本主義のからくり

山川均著



一 資本主義の生産	一	九 生産力と財産制度との衝突	四二
二 経済組織の變遷	五	十 私有財産主義の動搖	四六
三 生産者と生産機關との分離	一三	十一 社會生活の危険と不安	五一
四 勞働の商品化	一九	十二 生活の改造	五二
五 生産と消費との矛盾	二三	十三 自己改造の努力	五六
六 資本制度の浪費	二七	十四 社會の改造	六三
七 人間浪費の制度	三三	十五 闘争の生活	七〇
八 社會的生産と個人的所有との矛盾	三九		

## (一) 資本主義の生産

「不思議な世の中」 今から百年ほど前に、佛蘭西にフウリエーといふ人があつた。フウリエーは若い頃、マルセイユの或る穀物問屋に勤めてゐたが、或日のこと、マルセイユ港に碇泊してゐた船から、輸入の小麥を海中に棄てる仕事の監督を命ぜられた。當時佛蘭西は凶作のために小麥が缺乏し、多數の貧乏人はパンの代りに馬鈴薯を食ふてゐた。しかし穀物商人は、もつと小麥の値段を上げ上げるために、輸入小麥を船中に匿してゐるうちに、下積みの方から腐つたので、海中に棄てたのである。一方には食ふべき小麥のない多數の人々があり、一方には折角輸入した小麥を腐らせて海中に投げ棄てる。一體これはどうした事だらう。フウリエーは此の奇怪な現象を見て、現在の社會の組織組み立てのどこかに、缺陷があるに相違ないといふ疑ひを起し、それから一生涯を理想社會の研究に捧げたと云ふことである。

然しこれは態々百年前の佛蘭西に往くまでもなく、吾々が日常見る目前の事實であつて、唯だ

不思議なのは、人々が此の奇怪な事實に對して、フウリエーの起したような疑問を起さぬことである。

【國民經濟學】 福田徳三博士の「國民經濟學講話」といふ本の中には、斯う書いてある。

「……或年上海其他の支那市場で、人參の價が非常に下落しました……それで誰人の英斷であつたか知りませんが、此人參を仁川埠頭で焼却したさうです。人參は高價なもので一斤何圓といふものを、徒らに燃やして仕舞つたのです。これは物といふ點から云へば、非常に勿體ない話で、藥にして置けば大變役に立つものを、ムザ／＼焼棄するのは冗なこと不經濟なことをする様ですが、それが却つて經濟に合つたのです。と申すのは仁川埠頭で何斤焼棄たといふことを聞いたら、數日ならずして上海に於ける人參の相場が回復して残つた物が高く賣れまして、安値で皆賣つたよりも焼いて仕舞つた残りを高く賣つた方が利益で大いに儲けたと云ふ事です……」

人參を服ませたくとも服ませられぬ人が澤山ある。其の時に折角出來た人參を燒棄てる。之が「經濟に副つた」道である。そして斯のような經濟の道を研究するのが「國民經濟學」といふもの

なのである！

ところが、之とても、實は朝鮮三界まで往くがものはない。昨年春あたりから經濟界の不景氣といふことで、七月中には全國にある三菱の倉庫だけでも、始末に困る謂ゆる「滞貨」が十四億圓に上り、國民が日常品の暴騰に苦んで居る時に、一億五千萬圓の綿織物は倉庫の下積みとなり一億八千萬圓の砂糖は倉庫の中で溶けて流れてゐた。これはよく考へて見ると、佛蘭西國民の多數がパンの代りに馬鈴薯を食つて居る時に、船積み的小麥を海中に棄てたのと、全く同じ現象なのである。

【利潤の爲の生産】 昨今は米國には六七百萬、英國には三四百萬の失業勞働者がある。それなら生活の必需品が有り餘つて居る爲に、爲すべき仕事がないのかと云ふと、決してさうでない。「露國には飢饉がある、然しながら英國には飢饉がある！」これ等の幾百萬の勞働者は飢饉に迫つて居る。それならどし／＼生活の必需品を生産したらよさそうなものだが、事實は反對に勞働者は働きたくても仕事の口がない。

昨年不景氣以來、日本でも紡績會社は操業を短縮する。機械工場は閉鎖する。そして多數の

四  
労働者は失業した。それなら日本の國民は米や織物に有り餘つてゐたかと云ふと、決してそうではない。それなら操業を短縮したり工場を閉鎖しないで、どしどし品物を造つた方が國民全體の利益である。ところが却つて操業を短縮したり、工場を閉鎖するものは何故であらうか。云ふまでもない、生産しても引合はぬからである。即ち生産するよりも全く生産せぬ方が、又多く生産するよりも少しく生産した方が、資本家の利益だからである。今日の經濟組織では、生産は國民全體、社會全體の利益や幸福を目的として行はれて居るのでなく、資本家なり企業者なりの利潤と収益を目的として行はれて居るのである。そこで品物を造らぬ方が、資本家や企業者の利益となる場合には、よし社會全體の利益と幸福とが如何に其品物を必要としてゐようとも、彼等は直に其の生産を中止する、それは丁度、人参を賣るより焼棄する方が利益な場合には、人参を焼棄することが「經濟」であり、輸入米を陸揚げするよりは、腐らせて棄てた方が利益な場合には、よし社會の多數が餓死して居つても、小麦を海中に投棄することに躊躇せぬのと同じである。

## (二) 經濟組織の變遷

「人の罪か制度の罪か」これは一人々々の資本家または企業家その人が悪るいのかと云ふと、必ずしもそうでない。或人は奸商を征伐せよ、暴利を取縮れと叫ぶかも知らぬが、今日の經濟の組織と組立ての下では、これが即ち「經濟に副つた」遣り方であつて、其のためには「國民經濟學」といふ立派な學問があり、澤山の偉らい大學者が、専門にこの遣り口を研究して居るのである。そこで若し、茲に博愛的な一資本家があつて、斯ような法則に反した事業の經營方法を取つたら、この資本家は、直に競争に負けて事業界から葬られて了ふに相違ない。

そこで問題は、一人々々としての資本家や企業家が善いか悪るいか、彼等に公德心があるか無いかといふ事ではなくて、斯ような經濟の組織組立ては、善いか悪るいかと云ふ事である。

「善い組織と悪い組織」然らば或る經濟組織を善いとか悪いとか云ふ、善惡の標準は何所にあるかと云ふと、それは其の經濟組織には、どれだけ有效に社會の全員を養つてゆく能力があるか、

又どれほど経済的に、社会の全員を養つてゆく能力があるかといふ、能率如何と云ふことにある。即ち社会全體、社会の全員を着せ、住まはせ、食はせる、即ち給養する上に能率の高い経済組織は善い経済組織であつて、能率の低い経済組織は、悪い経済組織であると云ふことが出来る。そして大昔この方、人間社会の歴史は、経済組織が色々に變遷した歴史であつた。その變遷の仕方、常に一層能率の高い経済組織が、能率の低い経済組織に代つて来て居るのである。

〔原始時代の共産制〕 原始時代の人間が生活の資料を得た方法——即ち生産方法——は、主として天然の動物を捕まへて食物とする漁獵であつた。この時代には一人々々の人間の一日の労働の結果は、やつと其の一人の生活を支え得るだけであつて、それ以上には殆んど少しの剰餘をも生産しなかつた。従つて他人の労働の結果を横取りして生活するといふことは、したくとも出来なかつた。従つて又たそんな考へは、誰れの頭にも浮んで來なかつた。即ち他人の労働の掠奪または搾取と云ふことは、此の時代には不可能だつたのである。斯うに人間の生産力が極く低い時代には、他人を奴隸として働かせても、唯だ本人たる奴隸自身の生活資料を生産するだけであつて、奴隸の所有者——主人——には少しの利益にもならぬ。この時代が謂ゆる原始共産制度の

時代であつて、或人の云つたように、當時の共産制度は富は共産といふよりも、寧ろ貧乏の共有だつたのである。

〔奴隸——最初の搾取制度〕 ところが人間が天然の動物を飼養する牧畜を發明し、恐らくは動物の飼料となる牧草から穀草を發見して之を栽培するようになり、こゝに農業が始まると、人間の労働は、著しく生産力が増して來た。斯うなると、人々が、一日の間労働すると、其の一人一日の生活に必要なものを生産した上に、尙ほ幾らかの剰餘を生産することになる。

人間の生産力が増加して、剰餘生産が出來得るようになると、初めて他人の労働を搾取することが出来るやうになる。そこで種族と種族との戦争で捕虜が出來ると、今までは殺して了つてゐたが、是からは成るべく活かしておき、奴隸として働かせることになる。奴隸制度は、今日では何人も之を是認するものはないが、それでも當時は、一層進歩した生産の形態だつたのである。

〔農奴の制度〕 然し農業が進歩して——即ち人間の生産技術が進歩して——労働の生産力が尙ほ一層増加して來ると、奴隸制度は漸次に不経済なものとなつた。奴隸の労働は自由人の労働に較べると、遙に能率が低い。其上に監視の必要がある。アゼンスでは三十萬人の奴隸の労働を監視

する爲には、四萬五千人の奴隸巡査の外に、多數の武装した監視人を必要とした。殊に奴隸が社會に重要な生産力となつて來るにつれて、彼等も段々持主に反抗するようになった。そして此の反抗は、初には單純な突發的個人的のものであつたが、後には大衆的の反亂となつて、社會の秩序を危うくするようになった。

その結果、奴隸制度は、緩和された奴隸制度とも云ふべき、農奴制度に變化した。

農業の技術が進歩して、土地が主要の生産機關となるに随つて、土地資本主義ともいふべき封建制度が発達し、土地は大小の領主の掌中に集中せられて來た。そこで農民は最早や今迄のように、家畜同様の所有物ではなくなつたが、土地に附屬した間接の奴隸であつた。斯うに奴隸制度は農奴制度となつて、農民は半自由な労働者となり、労働の搾取も奴隸の場合よりは一層間接的になり、従つてそれだけ露骨でなく、婉曲になつて來た。斯うに封建制度は、半自由な農民の労働を土臺とする農業制度であつて、奴隸制度よりも一層能率の高い經濟組織であつた。

【都市と手工工業】この間に手工工業が段々發達した。そして農奴の生活に甘んぜぬ氣概のある青年は、獨立の手工業者となつて、領主の權力の全く届かぬか、それとも領主の權力が比較的弱

い地方に移住したので、到る處に都市が發達した。手工工業が新しい生産方法として、社會的に重要になつて來るに従つて、都市の手工業者は段々と領主の支配を脱して獨立するようになり、る場合には、領主は進んで彼等に多少の自由や特權を與へて、都市と手工工業との進歩を促した或手工業者は各々小規模の職場を持ち、簡單な道具と原料を持つ獨立の生産者であつて、彼等は是等の道具と原料——即ち生産機關に——自分の労働力を應用して、色々の手工品を生産する。そして生産したものは、當然自分の所有に歸する。斯うに手工業者は、一面には労働者であると同時に、一面には生産機關の所有者——今日の資本家——である。そして自分の算盤勘定で事業を經營してゆく點では、今日の企業家の性質をも備へて居る。そこで労働と生産機關——今日の資本——とは、手工工業の場合には、同一人の手に歸してゐるのである。

その結果は、謂ゆる「労働の全酬權」といふ思想が實際の上に行はれて居つた。即ち自分の生産機關に自分の労働を應用し、それから出來た生産物は、全部自分が收得するのであるから、自己の労働の果實は、自己が收得するといふ私有財産主義の眞髓は、中世の手工工業となつて、最も美しい花を開いたのである。

手工業によつて人間の勞働の生産力は著るしく増加した。然るに此の手工制度も、生産の技術が今一段の進歩をして見ると、全く不都合な制度になつて來た。

「近代の機械工業」 蒸汽機關が發明され、大規模の機械組織を用ひて大量的の生産をやる日になると、生産機關は逆も一人々々で所有して、一人々々で應用する譯にはゆかぬ。従つて一人々々が其の職場や生産器具や原料を所有する手工制度は、全く不都合なものであつて、機械制の生産が行はれば勢ひこの手工制度が倒れねばならぬし、又た手工制度と之に伴ふ色々の制度が倒れぬ限りは、一層生産力の高い大規模の機械組織や工場制度を、生産に應用する譯にゆかぬ。そこで會ては最も能率の高い生産の方法であつたから行はれた手工制度も、生産技術が一層進んで來ると、却つてそれ以上に生産力を發達させる妨げとなつて來る。

そこで此の手工制度が段々衰へて、之に代つたものが現在の機械工業制度であつて、吾々は之を近世的資本主義、工業資本主義、又は一口に資本主義の經濟制度と呼んで居る。

「經濟組織の進化する法則」 斯ように原始時代の共產制度が崩壊して以來、色々の經濟組織が興つたり倒れたりした。そして一度びは人間社會の必要に應じて生まれた生産制度も、後には不必

要となり、一度びは有効であつた制度も、後には有害となり、一度びは社會を給養する上に、比較的適當だつた制度も、後には社會を給養する力の無いものとなり、一度びは人間社會の進歩を助けた合理的な制度も、後には却つて進歩を阻害する不合理な制度となる。今日まで人間の社會が經驗して來た如何なる經濟組織も、此の點では皆な同じことであつた。どの經濟制度も、永久に有効な制度ではなく、どの經濟制度も、會ては有効でなかつたものはない。そこでどの經濟組織も何時かは、この制度を打破せぬ限りは生産力の進歩、従つて人間社會の進歩が不可能となるか不可能とはならぬまでも、著るしく進歩が阻害せられるといふ時期が來る。そして此の時期を指して、マルクスは社會的革命的時代と名づけて居るのである。

「社會の物質的生產が、其の發達の一定段階に達すると、舊來の生産條件——之が法律上に現れたものが、舊來の財産關係——と衝突する。是等の財産關係は、會ては生産力の發達の形態であつたが、今や一轉して生産の桎梏となる。そこで社會革命的時期が開始する。經濟的基礎の變化につれて、廣大な上部構造全體は、徐々に若くは急激に革命せられるのである。」

「マルクスの説明」 そこでこのマルクスの言葉を實例に當てはめて見ると、例へば社會の物質的



生産が手工業といふ程度に發達すると、生産機關は獨立の手工業者が所有し、そして此の生産機關は、獨立の手工業者——即ち親方職人——と傭はれ職人、乃至は同業組合の規則で定められた一定の人数の年俸徒弟によつて、利用せられるといふような、一定の生産條件が定まつて来る。そして此の生産條件が法律の形を取つたものが、即ち當時の財産關係である。そこで當時は此の新しい生産の條件は、それ以前の奴隸制度や農奴制度に較べて、一層發達した生産力の形態であつたが、社會の生産が更に一層進歩して、機械による生産といふ程度に達すると、この新しい生産力と舊來の生産條件とが衝突する。そして舊來の生産條件が取除かれぬ限りは、新しい生産力は充分に伸びることが出来なくなる。この舊るい生産條件が生産の障害物となつた瞬間こそ、社會的變革の時期であつて、舊るい生産の組織は新しい生産力の前に粉碎され、その結果として一層有効な、一層能率の高い經濟制度が之に代はることとなる。

【資本主義はどうか】 然らば現在の、資本主義の經濟組織はどうであらうか。民衆が一枚の着更へに困つてゐる時に、絲と織物との生産を制限し、數百萬の人々が勞働を欲して居る時に、唯だ資本家が引合はぬといふことの爲に生産を中止しなければならぬことは、明かにこの經濟組織

が生産の「桎梏」となつた證據ではあるまいか。

今日歐羅巴の資本主義各國は、孰れも經濟上の再興といふ問題に頭を悩まして居る。此の問題の解決に成功するとな否とは、歐羅巴の資本主義の死活の問題である。そして經濟上の再興とは、要するに生産力の増加といふことに外ならぬ。

ところが歐羅巴各國では、幾百萬の人々は、勞働を欲しても勞働の機會が與へられないで、怠惰を強制せられて居る。して見ると今日歐羅巴の資本主義は、この幾千萬人の生産力を利用する能力が無くなつて居るのである。これは今日、吾々の生活してゐる社會の經濟組織が、果して社會全體を給養する能力のある制度であるかどうかを、冷靜に省察すべき時期に達して居る證據ではあるまいか。

### (三) 生産者と生産機關との分離

【資本制度の特徴】 そこで今や吾々は、今日現にこの社會の全員を給養してゐる仕組み、即ち現

在の經濟の組織が、良い經濟組織であるか悪い經濟組織であるか、果して社會全體を給養する能率のある經濟組織であるか否かと云ふことを、冷静に考へなければならぬ場合となつて來た。

現在の經濟組織は、普通に資本主義の經濟組織、又は資本制度と呼ばれる經濟の組織である。然らばこの資本制度の本質、その根本的特徴は何處にあるかといふと、先づ第一には、生産者と生産機關とが、はつきりと分離したものである。

「機械工業と無産者」今日の機械工業は、中世紀の手工工業の後継者であつて、手工工業の場合には小規模の道具でやつたことを、機械工業の場合には、澤山の道具から成立つ機械でやつて居るまでのことである。しかし道具が機械に變化した——即ち生産技術が變化した——結果として經濟の組織は全く根柢から一變した。手工工業の場合には、前にも述べた通り、道具や職場や原料など——即ち一口に云へば生産機關——は、この生産機關の上に自分自身の勞働力を應用する獨立の生産者が、めい／＼に所有してゐたものである。即ち生産機關と之を利用する勞働力とは、同じ一人の人に屬してゐた。ところが今日の機械工業の時代になつて見ると、生産機關は莫大な金額に上るから、とても一人々々の生産者が、銘々自分の生産機關を持つ譯にはゆかぬ。

また機械工業の場合には、一組の生産機關は、何十人、何百人、何千人といふ多數の人々の勞働力を同時に應用して、初めて利用することの出来るものであるから、生産者がめい／＼自分自身の生産機關を持つて居るようでは、固より機械工業の成立つ筈はない。そこで今日の機械工業は、勞働力だけを持つてゐて、何等の生産機關をも所有せぬ人々——即ち無産者——があつてこそ、初めて成立つことの出来るものである。マルクスは「資本論」のうちに斯う云つて居る。

「……個人化し、そして多くの人々の手に散らばつてゐた生産機關が、社會的に聚積せられた生産機關に變化すること、多數の小財産が、少數の大財産に變化すること、そして人民の大衆から土地を剝奪し、生活の手段を剝奪し、勞働の機關を剝奪すること、——この恐るべき痛ましい大衆の剝奪こそ、資本の歴史の序幕である。」

そこで資本制度の第一の特徴は、生産機關を應用する生産者と、生産機關とが、全く分離して別々の人の所有に歸して居ることである。一方には生産機關を所有する人々があり、一方には、勞働力の外には何物をも持たぬ生産者——即ち無産者——がある。勿論今日と雖も、自分の生産機關に自分の勞働力を應用する獨立の生産者が無いではないが、之は過去の遺物であつて、資本

制度と階級と特徴ではないのである。

【階級と階級との対立】 生産者が生産機關から引離された結果として、社會は利害の相反した二つの階級に分裂した。資本制度以前の世の中にも、勿論、階級の區別があつた。しかし例へば士農工商とか、貴族と平民とかいふやうな階級の區別は、最早や今日いふところの社會的階級ではなくつた。社會的階級なるものは、其人の門地とか血族とかの關係ではなくて、其人が社會の經濟組織のうち如何なる位置を占めて居るかで定まるものである。言葉を変へて云へば、其人が、社會の經濟組織といふ大きな機械のうちの齒車として、どんな種類の働きをして居るかといふことで定まるものである。も一つ之を具體的に言ひ換へれば、其人がどんな方法で、生活のための収入を得て居るかといふことで定まるものである。

固より収入を得る方法は、色々であるけれども、生産者が生産機關から引離されてゐる資本制度の下では、収入の方法は、どこの詰りまで押しつめて見れば、唯だ二つの方法に歸着する——即ち生産機關の所有から収入を得て居るか、それとも唯一の所有物たる労働力を賣ることによつて収入を得て居るかである。

この二つの代表的な生活の方法に従つて、社會は二つの代表的階級に分かれて居る——即ち生産機關の所有者たる資本家階級と、肉體上精神上の勤勞をする力の外には、何物も持たぬ無産階級とに分れて居る。

【支配と被支配の關係】 然るに多數の民衆は、生産の第一の要件たる労働力は持つて居るが、この労働力を實際に應用すべき、生産機關は他人に持たれて居る。

ところが今日のやうな大機械工業の世の中になつては、労働力——即ち労働する力——だけを持つて居たのでは、一寸の糸すら生産することも出来ない。労働力を機械と原料との上に應用してこそ、すべての物が生産せられるのであるから、労働力を共まゝ着ることも食ふことも出来ない。そこで労働力しか持たぬ者は、機械や原料——即ち生産機關——を持つて居る者に、喉元を抑へられて居る譯である。

そこで社會が經濟上の階級に分れるといふことは、やがて經濟上の支配と被支配といふことを意味して居る。即ち一方の階級が他の階級を、經濟上で支配する、一方の階級が他の階級に、經濟上で支配されるといふことを意味して居る。

ところが経済上の關係は、やがて政治上、法律上、道徳上、思想上の關係となつて現はれるものである。即ち経済上で支配し支配されると云ふ關係は、やがて政治上、法律上、道徳上、思想上でも、同じく支配し支配される關係を造るものである。そこで階級の區別はやがて政治上、法律上、道徳上、思想上の支配と被支配との關係となつて来る。

【資本制度の根本的矛盾】 斯うに生産者が生産機關から引離された結果として、資本制度の社會は、利害を異にし、目的を異にし、思想と道徳と心理とを異にした二大階級に分裂した。もともと社會と云へば、同一の目的をもつた一つの共同生活體を指すのである。ところが資本制度の社會は、今述べたやうな資本主義の本質そのものゝ結果として、今や一つの共同生活體たる實質を失ふて、寧ろ二つの社會——相敵對する二つの社會——であるかの如き觀を呈して來たのである。

かやうに生産者が、その生産の機關から引離されたことが、即ち資本制度の出發點であつて、従つてまた、最も根本的な特徴であり、また最も重要な本質である。そして其他の資本制度の色の性質と特徴——資本制度のうちに包まれてゐる色々の不合理と矛盾——とは、いづれも此の根本の特徴と矛盾から出て來るものである。

### (四) 勞働の商品化

【自由を與へられた勞働者】 生産者が其の生産機關から引離された結果として、人間の勞働力は一個の商品となつた。勞働は神聖なりと云ふ言葉があるが、資本制度の下では、人間の勞働力はシャツや帽子と同じ一つの商品として、市場に賣買せられるものに過ぎぬ。そして此の商品に對して支拂はれる代價を指して、賃銀と云ふのである。

「……一方には他人の勞働力を買ひ、之によつて自分の所有する價値の總額を増加しようとする貨幣と生産機關と生産資料との所有者、他方には自分の勞働力の賣手たる……自由勞働者。彼等は二重の意味に於て自由勞働者である。即ち彼等は奴隸や農奴などの場合のやうに、生産機關の一部分を成すものでないといふ意味でも自由勞働者であるし、また彼等は小農の場合のやうに生産機關を持つて居らぬと云ふ意味でも、自由勞働者である。そこで彼等は何等、自分自身の生産

機關の累ひをも受けぬ全くの自由人である。』

【資本制度は商品労働がなくては存立せぬ】 マルクスは資本主義の生産が行はれる第一の條件を説明して、右の如く述べて居る。

マルクスは若い頃書いたものうちには、資本制度の下では労働者は商品であると云ふやうにも書いて居るが、之は不注意な書き方で、後年書いたものうちには、明かに、労働力が商品になつたと書いて居る。然し嚴密に云へば、人間の労働力は、この労働力によつて作つた商品とは性質の違ふところがある。しかし資本制度の世の中では、労働力は商品と同一に取扱はれて居る。資本制度の下では、労働力は商品となつたと云つてよいのである。

奴隸制度のやうに、奴隸の身柄が賣買せられる場合には、労働力は商品ではなかつた。資本制度の世の中になると、労働者は商品どころか立派な自由民であつて、法律の前には、——少くとも法律の手前だけでは——一労働者も大資本家も、一切平等といふ觸れ込みになつてゐる。しかし労働者は、その労働力を應用すべき生産機關を他人に握られて居るので、勢ひ生活の爲には、自分の労働力を生産機關の持主に賣らねばならぬ。そして生産機關の持主——資本家——は、原

料や石炭を市場で買入れるのと同じやうに、商品としての労働力を、何時でも、また入用の分量だけ、最も安い市場で自由に買入れることが出来、それでこそ、初めて收益を目的とする生産を営むことが出来るのであるから、商品としての労働がなくては資本制度は一日も存続することは出来ぬ。

【資本制度の第二の矛盾】 ところが今日では、労働者は自分の労働力をシャツや帽子と同じ商品として賣ることには、もはや満足しなくなつて來た。彼等は奴隸がその身柄を商品とされることに満足しなくなつたやうに、更に一步を進めて、自己の労働力が商品とされることに反對する。「労働は商品にあらず」といふ言葉は、現に労働者の口からも聞かれる叫びであるが、之は資本制度の今日、労働力が商品として取扱はれて居らぬと云ふ意味ではなく、労働力が商品とされてゐる現狀に對する、労働者の抗議と要求との聲である。世界各國の労働運動は、労働力が商品たることを廢止しようとする運動に外ならぬ。

斯うな労働者の要求が益々有力となつて、労働者もはや其の労働力を商品として市場に出すことを承知せぬ時期が來たならば、資本制度は一日も存続することは出来ぬ。そこで資本制度

のうちには、労働力を商品としておかねばならぬ必要と、商品労働を廃止しようとする強烈な要求と、この矛盾した二つの勢力が闘つて居るのである。

### (五) 生産と消費との矛盾

〔奴隷と労働者〕 労働力が商品となつたので、資本家は原料品を買入れるのと同じ意味で、労働力と名づける商品を市場で買入れる。この労働力の代償が、賃銀または給料である。

資本家が原料を市場で買入れるのは、此の原料に労働力を應用して更に新しい商品を製造すれば、原料に支拂つたより以上の貨幣價値が得られるからである。資本家が労働力を市場で買入れる動機も全く之と同じであつて、この労働力を原料に應用して品物を造れば、賃銀として支拂つたよりも、一層多くの金が取れるからである。

そこで今日の資本制度と、之を反面から見た賃銀制度といふものは、人間の一日の労働は、其人の一日の生活を支へるよりも多くのものを生産する力がある——即ち剰餘生産の力がある——

といふ事實が土臺となつて居る。昔の奴隷の持主が奴隷を飼つておいたのは、奴隷には剰餘生産の力があつたからである。今日の資本家が労働者を雇つるのは、労働者には其の賃銀以上のものを生産する力があるからである。此の點では今日の資本家が労働者に賃銀を支拂ふのは、往昔の奴隷の持主が奴隷に食物を與へたのと、全く同じ理由によるものである。そこで今日の賃銀制度を指して、賃銀奴隷制度と云ふのである。

奴隷制度も賃銀制度も、いづれも其の目的は剰餘生産の搾取であつて、奴隷の持主は、奴隷そのものが商品であつた爲に奴隷から剰餘生産物を勝手に搾取することが出来たが、今日の資本家は之と反對に、労働者が「自由」であつて、其の労働力が商品である爲に、同じ目的を一層巧妙に婉曲に、「人道的」に成し遂げて居る。資本制度が奴隷制度よりも「文明的」であると云はれる所以は茲にある。

〔生産過多〕 そこで、労働者は、一日(假りに)二回で労働力を資本家に賣渡す。資本家は此の労働力を自分の所有する生産機關——原料と機械——の上に應用する(即ち消費する)。そして其の結果、原料の代償と機械の損減とを差引いて、尙ほ其上に正味十圓の品物を生産したとする。此

の場合には労働者は、自分の労働力の代償として受取つた一日分の賃銀では、自分が一日の間に生産した品物の、僅かに五分の一しか買ひ戻すことが出来ぬ。そして其餘の五分の四は、利潤として、資本家の手に残つて居る。此の品物は一體誰れが買ふ。消費者の大多数は労働者である。ところが此の労働者は、毎日十圓づゝの品物を造つて、二圓づゝの賃銀を受取つて居る。之は丁度手桶に五杯づゝの水を汲み込んで、一杯づゝ汲み出すのと同じであるから、幾ら大きなタンクでも、何時かは溢れ出すにきまつて居る。そこで資本主義の経済には、折々品物が有り餘つて、市場といふタンクから溢れ出す時期が廻つて来る。経済學者は之を名づけて、生産過多の状態と云ふのである。

【經濟界の恐慌】 經濟上の恐慌は、大抵、生産過多の状態を呈するものであつて、昨年あたりの市場の状況は、丁度、この時期に達したものである。品物が有り餘つて買手が無い。そこで織物工場の閉鎖や紡績の操業短縮が續々行はれる。即ち品物が有り餘るから、生産額を制限して居るのである。然らば國民は絲や織物に有り餘つてゐるかと思ふと、決してそうでない。有り餘つて居るのは綿絲業者や織物業者の倉庫だけのことであつて、國民の多數は依然として生活必需品

の缺乏に苦んで居る。そこで生産過多とは云つて居るが、實は生産が多過ぎるのでなくて、労働者の消費力——買ふ力が——少な過ぎるのである。

恐慌は十年ごとに起るものと云はれてゐた。しかし今日では、一方には信用機關が世界的に發達したり、一方には生産が益々投機的になつたので、恐慌は必ずしも正確に十年ごとには起らない。また恐慌の様相も大分變つて來た。然し、急激な破綻が、ちり／＼と續く不景氣に變はるといふように、恐慌の症状は色々に變化しても、病氣は同じである。顔に吹き出しても脚に吹き出しても、急性でも慢性でも、梅毒は梅毒である。今日の資本主義生産の組織では、恐慌といふ經濟組織の梅毒は、何かの形を取つて、必ず或る時期には現はれて來る。

【戰爭は何故起る?】 工業が進歩すればする程、生産に必要な資本の割合は増加し、従つて資本の總額に對する利潤の歩合は減つて來る。そこで資本家は自己保存の爲には、益々澤山の生産をし、益々多くの剩餘生産を労働者から搾取する必要がある。ところが益々多くを生産し、益々多く労働者を搾取すると、それだけ生産過多といふ破綻の時期が早くなる。斯うに資本制度のうちには、生産を益々擴大してゆく必要と、生産を無限に擴大することを許さぬ二つの矛盾した

力が働いて居る。資本制度の生産は、自分自身の作用によつて破壊され、打ち伏せられて居るのである。

二六

そこで生産過多といふ避けられぬ運命を避けて、生産を無限に擴大して行かうとするところから、殖民地の競争と、外國市場の争奪とが起つて来る。そして其の結果は、いつでも國際戦争である。戦争は富の破壊であるから、勝つても敗けても、兎にも角にも、市場を塞いでゐた品物を一掃する効果がある。この點では、戦争は恐慌の代用物となることが出来る。そこで恐慌が過ぎ去つた跡と同じやうに、戦争が過ぎ去ると、嵐の後の快晴のやうに、再び事業が活氣づいて来る。斯やうに恐慌と戦争とは、行き詰つた資本制度を救ふ唯一の安全弁ではあるが、然しました、斯やうな富の破壊が過度を越えようと、今度は資本制度は此の手備から恢復することが出来なくなる。露國は戦争の途中で、既に此の時期に達したので、資本制度は滅亡した。歐羅巴の其他の國々は戦争が今年も繼續して居つたら、恐らく同一の運命に陥つて居つたらう。そこで彼等は講和を急いだのである。

恐慌と戦争とは、資本制度の内臓にかくれてゐる致命的の難病が、最も露骨に、且つ最も急激な形で現れた症状である。富が有り餘るために、國民の多數が失業者となつて衣食の道を失ふといふことは、資本制度以外の世の中では、とても想像することの出来ぬ奇怪な現象である。

### (六) 資本制度の浪費

「強制的の怠惰」 資本制度は、恐慌の安全弁と戦争の息抜きとで、僅かに存在をつゞけてゐる。斯やうに資本制度の生産は、一定の期間ごとに、莫大な富の破壊を行ふことによつて、僅に繼續せられて居るとしたならば、之は驚くべき浪費の制度であると謂はなければならぬ。資本制度は前にも述べた通り、曾ては能率ある有效な經濟制度であつたが、今日では、社會全體に取つて、極めて不經濟な制度となつたのである。

恐慌の起る度びに、そして慢性的の恐慌とも云ふべき不況期の到来すること、多數の労働者は失業して、強制的の怠惰を強ひられる。彼等は、働くべき意志がありながら、生産機關が他人の所有に歸して居るばかりに、労働の機會が得られないで莫大な労働力は全く浪費せられて仕舞



「産業の準備軍」斯ような労働力の浪費は、恐慌の場合には最も著しく現れるが、しかし、平時でも、資本制度は斯ような労働力の浪費なしには存続することが出来ぬ。資本制度の下では、先づ一定の需要があつて、然る後に之に應じた生産が行はれるのではなくて、生産は多かれ少かれ投機の性質を帯びて居る。そこで市場の變動につれて、生産は絶えず動搖し伸縮する。そして生産が一伸一縮する度に、多数の労働者は工場に吸ひ込まれるかと思ふと、忽ちにして、失業者として巷に吐き出される。斯うに資本制度の生産が、自由に膨脹したり収縮したりする爲めには、斷えず多数の失業者が、産業の準備軍として労働市場にあることが必要である。そして之は云ふ迄もなく、社會全體に取つては、容易ならぬ労働力の空費を意味して居る。然るに資本主義の生産は、この不経済と浪費なしには、一日も存続することが出来ぬ。

「經濟的の無政府状態」 資本制度の下では、社會の全員を養ふ爲めに、これこれの品物がこれだけ必要であるから、これだけの生産機關と労働力とを振り向けて其の品物を生産するといふ譯ではなく、何等の計劃も統一もない謂ゆる經濟的の無政府状態であつて、之を支配してゐるものは

唯だ個々の資本家が最大の利益を収めようとする欲望である。之が謂ゆる自由競争であつて、其の結果として資本制度の生産には、強制的の意旨——失業——による労働力の浪費以外にも、尙ほそれ以外の驚くべき浪費が行はれて居るのである。

「無益な品物の生産」 資本制度の下では、失業の爲めに莫大な労働力が浪費されて居ることは暫く指し、現に働いてゐる労働者のうちでも、實際社會に取つて必要な生産に従事して居る者は極く少数であつて、多くの労働力は、無益に浪費せられて居る。その證據には歐洲の大戦争には、各國の政府は多数の労働者を従來の仕事から取り去つて軍需品工場に使用したにも拘はらず、必要品の生産は、之が爲に少しも減じなかつたと云ふことである。之は平時に、澤山の労働力が無益な事に使はれて居つた證據である。

「必要な生産の制限」 その外、資本家や金持の個人的の必要や慾望を充たす爲に使はれてゐる人員は、驚くべき多数に上つて居るが、是等の人員は、何かしら労働なり勤勞なりして居るもの、社會全體に取つては、全く必要のない仕事をして居るものであるから、同じく労働力の浪費を意味するものである。

資本制度の下では、必要のある物が生産せられるのではなくて、買手のある物が生産せられるのであるから、社会全體に取つてさほど必要でない奢侈品や贅澤品や、乃至は積極的に有害な品物の生産の爲めにも、莫大な生産力が用ひられて居る。そして全て是等の生産力の浪費の結果は必要品の生産をそれだけ制限することとなる。是等の生産力は、必要缺くべからざる品物の生産に振向けられるものであり、また當然振向くべきものである。ところが資本制度の下では、是等の必要品が缺乏して居るにも拘らず、莫大な生産力は、無益な品物の生産や、無益な勤勞の爲に浪費せられて居る。そしてそれだけ、社会全體に取つて必要缺くべからざる品物の生産が妨げられ制限せられて居るのである。

【競争の浪費】 生産力の全然の浪費は暫く別として、現に必要品の生産に用ひられて居る勞働力のみ就いて見ても、今日の生産には、驚くべき浪費と不經濟とが行はれて居る。同じ品物を生産するにも、澤山の競争會社があつて、是等の會社は各々別々の建物を持ち、別々の動力を持ち、別々の計算を持ち、原料の仕入れと製品の販賣の爲めにも、別々の機關を設けて居る。また別々に専門家を使つて、お互ひに隠し合ひをして生産技術の研究をもやつて居る。そこで原料や勞働

を節約する發見や發明がされても、他の會社では同じ發見や發明をする爲めに、同じ經費と勞力とを費さねばならぬ。日本の紡績業などでも、互ひに女工の争奪をする結果として、全くの不熟練工たる女工を募集する爲にすら、一人前七八十圓から百圓以上の募集費を使ふて居る。

之について面白い實例がある。一八九五年に米國製釘工場が組織された時には、全國の製釘工場には、需要額の四倍の釘を生産するだけの製釘機械があつた。また米國にウキスキー會社の合同が出来た時には、八十の醸造所のうちで、僅かに十二だけで優に需要に應じ得ることが分つた。砂糖業も其通りで、四十の製糖工場のうち十八工場が破産したので、残りのうちの十八工場が集まつてトラストを組織した。そして其内十一工場を閉鎖し、七工場だけで充分に需要額の生産をすることが出来た。これと同じ事は、トラストや合同の行はれる場合には、常に經驗せられて居る事柄である。

之は何事を語るであらうか。云ふまでもなく、資本制度の下では、生産に統一と計畫とがなく唯だ利益を追ひ求める資本家の競争に任せられて居る結果として、工場なり、機械なりが、——即ち生産機關が——充分に利用せられて居らぬことを物語つて居るのである。

此の一事によつて見ても、資本制度には最早や生産機關と労働力——即ち社會の生産力——を充分に利用する能力が無いことが分るのである。

〔商業の浪費〕 斯ように浪費と不経済とで出来上つた品物を、交換し流通する段になると、資本制度の浪費と不経済とは一層驚くべきものである。

今日商品の流通——即ち商業——に費されてゐる莫大な資本と労働力とは、大部分は無用の冗費であつて、社會主義の經濟制度では、當然節約せらる可きものである。どの地方にも大少の都會があるが、是等の都會に軒を並べてゐる商店とその従業者との九分九厘までは、社會に取つて何等の必要もない仕事をして居るものである。市街の兩側に浪費の制度たる商店が軒を並べて居るのを見て、何人も不思議とせぬ程に、資本制度の下では、浪費は日常普通のこととなつて居る。

〔廣告費と販賣費〕 生産物を賣る爲に費されて居る浪費のうちで、最も甚だしいものは廣告の費用である。米國では一八九九年には新聞雜誌の收入は一億七千五百八十萬弗であつたが、一九〇九年には三億三千七百六十萬弗となり、十年間に九割二分の増加をした譯である。然るに一八九九年には、廣告料は全收入の五割四分四厘であつたが、一九〇九年には六割に増加したのである。

また英國では、會て石鹼工場の合同が組織せられた時、「デイリー・メール」紙は一ケ年二百萬圓の廣告料が減るといふので合同に反對した。其後の調査によると、合同の結果、新聞の廣告料は一ケ年五百萬圓減つたといふことである。

新聞の廣告料は、廣告費のほんの一部分であつて、新聞雜誌の廣告以外にも、到る所に天然の風致を損してゐる看板廣告や俗悪な電氣仕掛けの廣告などを見たら、資本制度の販賣方法が、如何に浪費を意味して居るか分る。實際の生産費用よりも、廣告費の方が澤山掛つて居る品物は今日決して珍らしくない。賣藥とか化粧品とか、其他主として廣告の力で販路を開いてゐる特殊な品物は暫らく別としても、例へば書籍のやうなものにしても、著者に支拂ふ原稿料の少くとも二倍か三倍は廣告費になつて居る。或る有力な雜誌では、印刷費と原稿料を總計したものよりも、遙かに多くに廣告費が掛つて居る。そこで本屋の店頭で五十錢の雜誌を買ふて讀む人は、その内の少くとも三十錢は、其朝の新聞で廣告を見た料金の支拂つてゐたのである。廣告以外にも多くの販賣員を出したり、定價表や説明書を作つたりする費用などを計算に入れたなら、資本制度の商業が、如何に高價なものであるかは直ぐ分かる。そして是等の費用は、結局は皆な需要者

が支拂つて居るのである。

〔資本制度は不経済〕 資本制度がそれ以前の経済制度に代つたのは、社会の生産力を一層有効に利用する制度だつたからである。然るに今日では、資本制度は最早や社会の生産力を充分に利用することが出来ぬ。否、今日では、驚くべき浪費と不経済の制度になつたのである。

斯うに資本制度は物質上の浪費の制度であるが、更に資本制度に含まれて居る人間の浪費、精神的の浪費を考へたなら、一層驚くべきものがある。

### (七) 人間浪費の制度

〔善き社会の條件〕 資本制度は物質的に不経済なばかりでなく、精神上にも極めて不経済な制度である。即ち富の浪費であるばかりでなく、同時に人間そのものの浪費を意味して居る。

社会の目的は個人にあるか、それとも個人の目的は社会にあるか、之は卵が先か鶏が先かをきめるほど六ヶ敷い問題である。しかしどんな社会か善い社会であるかと問ふたなら、全ての

人々に、各々その天稟の個性を發展させる最大の機会を與へる社会が善い社会であるといふことには、何人も異存がない。ところが資本主義の社会は、個性の發展を最も多く無視して居る社会であり、個性の獨立を、最も無残に破壊して居る制度である。

〔全ての人を商人化する社会〕 今日の世界では、藝術の才能のある人も、眞に藝術に一身を捧げることは出来ぬ。學問の才能ある人も、眞に學問に没頭することを許されぬ。何故ならば今日の経済組織の下では、全ての人は、藝術家たる前に、科學者たる前に、否、父たり母たり、妻たり同僚たる前に、必ず先づ商人とならねばならぬからである。今日の社会では、兎にも角にも、貨幣で計算の出来る何物かを造らぬ者は、社会のうちに生存の機会を與へられぬからである。

文藝家や藝術家は、何よりも尊い——彼等の謂ゆる人生そのものよりも尊い——「至上」な藝術の爲に身を捧げて、藝術品を創造してゐると思ふて居る。然し彼等は藝術品を造ると同時に、實は商品——シャツや猿股と均しい商品——を造つてゐる。彼等は唯だ、之を覺つて居らぬだけである。藝術家が、若し、藝術上の價值だけもつたものを造つて、貨幣で計算される價值——即ち購買方のある人々の需要を充たす品物——を造らぬなら、彼等は一日も生活することは出来ぬ。

工場の労働者は、はつきりと意識して商品をつ造つて居る。藝術家はアトリエや書齋といふ工場で自ら欺いて商品をつ造つてゐるだけの相違である。工場の労働者は、斯ような資本主義の法則に支配されて生きてゐることを卒直に自認する。故に彼等は資本主義に反抗する。アトリエの商品生産者は、至大な藝術に生きてゐる積りで居る。それ故に彼等は資本主義に反抗せぬ。けれども商品の生産者として、商品の取引人として行動してゐる範囲では、藝術家は藝術家たる前に、先づ商人となつて居るのである。

大學の教授でも、郵便局の事務員でも、小學校の先生でも、商店の店員でも、彼等の勤勞が單に社會に取つて有益なといふだけでは、一日も生活することは出来ぬ。彼等は有益なといふこと以外に、貨幣で計算の出来る價値のある勤勞をしなければならぬ。

そこで資本主義の社會では、全ての人は貨幣で計算のできる價値を造るといふ、唯だ一本筋の狭い険しい道に押し合ひへし合ひして居るのである。そして其の後ろからは、餓死といふ恐ろしい荆の筈をもつて、絶えず追ひ掛けられて居るのである。

【資本制度の社會は惡平等の社會】 斯ように資本主義の社會は、全ての人に生存の機會を平等に與

へない。そして此の不平等の結果として、全ての人を商品生産者といふ唯一一つの生活の型に押しこめ、個性と天分の發達を妨げて、最も惡い意味で平等にして居るのである。

マルクスは曾て、獨逸の舊ブルジョアを罵つて、彼等は「有らゆる立派な口上にも似ず、産業の木に實る黄金の林檎を拾ひ集め、~~い~~理や正義や名譽を、羊毛や砂糖やジャガ芋酒と交易することを辭せぬ」と云つたことがゐる。資本主義の經濟制度は、すべてのものを砂糖やジャガ芋と同じ商品とした。そして人間の勤勞をも、人間の良心をも、人間の貞操をも、否な人間そのものをも一律平等に、商品にしてしまつたのである。

資本主義が、折角人々の持つて生れた天稟と個性の發達を妨げて居る爲に、社會全體がどれだけの損失を蒙つて居るかはとても計算の出来ぬほど、莫大なものに相違ない。

【資本制度の社會は不適者生存の社會】 資本主義を辯護する人は、やゝもすると、今日の社會は自由競争の社會であつて、自由競争の結果として適者が生存し、社會は初めて進歩して居るものだといふ。成るほど今日の社會にも、精神的の方面にも競争が行はれて居るに相違ない。しかし多くの人は兩脚を縛られたり、足に鎖をつけられて競走場に立つて居る。それは自由な競争ではな

くて、最も不自由な、最も不公平な、最も不合理有害な競争である。

そこで今日の社会では、斯ような不公平不合理な状況に最もよく適應した者が、適者として生き残るのであつて、社会全體の進歩の爲めに、最も役に立つ者が適者として生き残る譯ではない。社会全體の進歩を計るといふ上から云つたなら、今日の社会では、適者が追ひ落されて、不適者が生き残つて居るのである。多くの青年は、唯だ相應の財産のある家庭に生まれて來なかつたといふ落度のために、其の天分の才能を開發する爲めの教育を受ける機會を奪はれて居る。ところが金持の家庭に生まれたと云ふ偶然の出來ごとは、天分の才能があると否とに拘らず、其人に教育を受ける特權を與へるばかりでなく、一生涯、社会に優越的地位を占める特權をも與へて居るのである。

これは驚くべき人間の浪費であり、不經濟であつて、その結果、社会全體の進歩と幸福とは犠牲にせられて居るのであるから、資本制度は如何にも高價にして、贅澤な制度であると云はねばならぬ。

### (八) 社會的生產と個人的所有との矛盾

〔個人的の生産と個人的の所有〕 斯うに資本主義の經濟制度には、色々の矛盾と不合理とを含むで居るが、さきにも述べた通り、是等の矛盾と不合理とは、根本の矛盾——生産者と生産機關との分離といふ矛盾——に源泉を發したものである。

この根本の矛盾は、一面には今日の社会に見られる種々雑多な矛盾と不合理となつて現れて居る。そしてまた一面には、資本主義の經濟組織そのものをして、資本主義自身力では、到底救ひ出すことの出來ぬような根本的の矛盾に陥入らしめたのである。

前にも述べた通り、手工工業による獨立の生産者の場合には、一本立ちの職人が、自分の勞働を自分の生産機關——原料と道具——の上に應用し、出來上つた生産物は、同じく自分の所有となる。即ち生産機關の所有も個人的であるし、此の生産機關を利用する方法——即ち生産方法——も個人的である。そして之から出來た生産物の所有も、個人的である。即ち終始一貫して個人

的だつたのである。

「生産と生産機關は社會化した」ところが資本主義の機械工業になると、大規模の機械や工場は、とても一人々々の労働者が、めい／＼一つ宛つ個人的に所有することは出来ない。否、大資本家すらも、今日では最早や一人で持つては居らぬ。原料とても同じことである。そこで會社組織の如きものが現れて、一と揃ひの生産機關を、少數の人が集合的、團體的に所有することゝなつた更に大きいものになると、幾つもの會社が合同して、生産機關を所有する場がある。また鐵道などのやうに、國家が生産機關を所有する場合もある。即ち機械工業では、生産機關の所有は、最早や純粹に個人的ではなく、或る程度までは集合的、團體的になつて居る。それなら生産機關の所有は社會的になつたかといふと、今日はまだそうではない。云はゞ純粹な個人的の所有から社會的の所有になりかけて居ると云ふまでであつて、矢張り少數の定まつた個人が、私有して居るのである。然しながら兎にも角にも、是等の生産機關は、純粹に一個人が私有するには適せぬといふことだけは、事實の上に證明せられて居るのである。即ち今日の生産機關そのものは、社會的の性質をもつて居る。そこで個人の私有に適しない。しかし資本主義そのものは、私有財産

主義の土臺の上に立つて居る。そこで今日の生産機關の性質と、今日の財産制度——即ち私有主義——とが衝突をして居るのである。

「生産機關の利用も社會化した」更にこの生産機關が利用せられる方法はどうかと云ふと、勿論、一人の労働力では利用することが出来ぬ、一本立ちの親方職人が、五人か六人の職人や年期限弟を使つたのでは、とても此の生産機關を利用することは出来ぬ。そこで生産機關の利用といふことになると、何處までも集合的、團體的、若しくは社會的となつたのである。

例へば一つの蒸氣汽鍋なり發電機なりで運轉せられてゐる紡績機械があるとする。此の紡績機械を利用するには何百人乃至は何千人の労働者が、集合的團體的に協力しなければならぬ。一つの打綿機の下にも數十人の労働者が集合的に働いて居る。一つの混綿機の下でも、数十人の労働者が集合的に働いて居る。一つの梳綿機にも、同じく数十人の労働者が働いて居る。そして紡績機の下には何百人何千人の労働者が集合的に働いて居る。唯だ一つの動力によつて何百人何千人の労働者が集合的に働いて居るといふばかりでなく、混綿部、梳綿部から荷造部に至るまで、部門部門の労働者の間には、經濟學者の謂ゆる分業と協業とが行はれて居つて、其一つの部門の仕事

が停まつても、絲の生産といふ全體の工程が停まるといふように、各部門々々の労働者の間には切り離すことの出来ぬ密接な有機的關係がある。

ところが一つの動力で動いてゐる、斯ういふ工場が幾つもある。紡績もあれば織物もある。製鐵もあれば機械工場もある。そして是等の色々の機械組織の下に働いて居る一團の労働者その他の一團の労働者との仕事の間にも、多いか少ないか、必ず有機的關係がある。紡績工と織工とは何の關係もないようではあるが、社會の生産といふ廣い立場から見ると、一工場内の分業と協業と同じように全ての産業は、もつと廣い範圍での分業と協業に外ならぬ。

〔生産方法と財産制度との矛盾〕斯うに資本主義の經濟制度では、財産の私有といふことが土臺となつて居るにも拘はらず、生産機關の所有といふ點では、最早や純粹な個人的所有といふことが毀れかゝつて居る。そして此の生産機關を利用する方法——即ち生産の方法——になると、個人的の性質は全く無くなつて、集合的社會的になつて來た。即ち多數の労働者が生産機關を集合的社會的に應用して、初めて生産が行はれることゝなつたのである。

それでは集合的社會的に生産せられた品物はどうなるかと云ふと、之は徹頭徹尾、個人的に所

有せられて居る。社會的に生産せられたものが、個人的に所有される。生産は社會主義で所有は個人主義である。もう一つ云ひ換へれば、造る間は社會的で、持つ段には個人的である。即ち資本主義の經濟制度では、生産方法とそれから所有方法とが、互ひに矛盾し衝突して居るのである。

### (九) 生産力と財産制度との衝突

〔失業問題の意義〕生産方法と所有方法（即ち財産關係、又は財産制度）とが矛盾衝突して來た結果は、此うへ生産力を増進することが不可能となつたことである。

生産過多とか、恐慌とか、その他の事柄で、資本主義の生産が著しく制限せられて居ることは既に説明した通りであつて、今日の世の中に、品物が有り餘る爲めに不景氣が起つたり、品物が有り餘る爲めに、多くの人が飢えるといふような不思議な現象が起るのは、畢竟、生産方法と所有方法とが、矛盾衝突して居るからである。

假へば今、英國に四百萬人の失業者があつて、飢俄に迫つて居るとする。之を救ふ爲には、こ



の四百萬人の勞働力を働かせて、品物をどしどし生産する外には途がない。即ち英國の社會は、生産の増加を必要として居るのである。ところが實際には、そうする譯にゆかぬ。資本家は、生産をして儲からぬ。従つて生産は増加せぬ。之は云ひ換へて見れば、生産力は有り餘つて居るが、生産した品物は、それを必要とする人々の手には遣入らないで、他の人々の所有に歸するといふ財産制度がある爲めに、見す／＼この生産力を利用することが出来ないで居るのである。つまり生産力は伸びようとしても、財産制度といふ外側の殻に包まれて居る爲めに、少しも伸びることが出来なくなつたといふ有様である。

【魔物と魔術師】そこで資本主義の經濟制度では、一方には愈々益々生産力を増加する必要がある。ところが生産力を増加する爲には、色々の大規模な機械が用ひられるようになり、生産の法は愈々益々社會的になつて来る。そして其れが或る程度に達すると、此のうへ生産力が増加しようとする、財産制度といふ外側の殻にぶつかることになる。

資本主義はマルクスの云つたように「僅か百年ばかりの階級的支配の中に、過去一切の諸時代を合したよりも一層多く、一層巨大な生産力を作り出した」ところが今日は、資本主義は最早や

この巨大な生産力を、統御し利用することが出来なくなつた。それは丁度、かの魔術師が、呪文を唱へて地の底から様々の魔物呼び出しておきながら、却つてそれを制御する力を失つたのと同じである。

【生産力の障壁】資本主義の土臺となつてゐる財産制度といふ殻の中では、最早や生産力の芽生えは、此の上の成長と發達とをすることが出来なくなつて来た。芽生えが枯れるか、殻がはぢけるか、どちらかでないければ解決がつかぬことになつた。マルクスは斯う書いて居る。

「社會の手にある生産力は、最早やブルジョアの財産に必要な條件を促進せぬ。否、却つて生産力を束縛してゐる是等の條件に取つて、生産力は餘りに有力となる。そこで生産力がこの束縛を突破する度びごとに、ブルジョアの全社會を無秩序に陥し入れ、ブルジョア財産の存在を危ふくする——」

【資本制度の功罪】資本主義の經濟制度は、それ以前の如何なる經濟制度よりも、能率の高い生産制度であつて、資本制度の下で、初めて人間の生産力は未曾有の發達をした。そしてそれ故に資本制度は能く封建制度や手工制度に代つて、廣く行はれるようになつた。

ところが今日では、資本制度の外敷の中では、最早や新しい生産力の若芽が、これ以上に伸びられなくなつた。即ち新しい生命と奮るい制度とが衝突してゐるのである。

### (十) 私有財産主義の動搖

「私有財産制は近頃の現象」　そこでこの生産力の新しい若芽の成長を束縛してゐる敷の性質をしらべて見る必要がある。

私有財産といふ觀念は、動物にすらも深い根強い本能だといふ學者もある。そして多くの人々は、私有財産の權利は、人間の先天的の權利であり、私有財産の制度は、永久の昔から變らぬ制度であると考へてゐる。ところが事實は反對に、私有財産制度といふものが人間の社會に現はれたのは比較的新しいことであつて、人類は過去幾十萬年、乃至は幾百萬年の間——即ち人類が地球の上に現れてから今日までの大部分の年月の間——私有財産なるものを知らずに過して來たのである。

「私有財産觀念の基礎」　それでは、私有財産の起原はどこにあるかと云ふと、先づ毎日着てゐる着物だとか、日々使つてゐる狩獵用の武器などが、先づ第一に、之が自分のものだといふことになつた。即ち是等の品物は、日常自分の肌身につけて居るものでん殆んど自分自身の體の一部分と見做されてゐた。そこで此の時代には、人が死ぬると、其人の生前の持物も一緒に葬るなり、焼き棄てるなりしたものである。

この觀念がもう一つ變ると、今度は、自分の勞働の結果として生じたものは、其人が自由に處分すべきものである、即ち其人のものだといふことになる。私有財産の根柢となり、そして私有財産を正當とした理由はどこにあるかと云へば、自分の勞働によつて生産せられたものは、其人に屬するといふ根本觀念である。

成るほど此の觀念は、或る程度までは、既に正しいものである。兎にも角にも、或る品物を、誰れかのものときめねばならぬ場合には、自分の勞働によつて其の品物を造つた人のものときめるのは、或る程度まで正しい考へである。假令へば、先きに風々説明した獨立の手工業者の場合には、自分の生産機關に自分の勞働力を應用して品物を生産する。そして其の生産物は、明らか

に自分のものである。之は如何にも義理明白であつて、殆んど疑ひを挿む餘地がない。若し自分の生産機關に自分の労働力を應用して出来上つた品物を他人が持つてゆくことになれば、それを變てこなものである。

【労働全權と私有財産主義】之はやがて自分の労働の成果は、全部自分のものにするといふ、労働全權といふ思想の土臺となつてゐる考へである。或人は、労働全權といふ思想を以て、社會主義的の考へであるかの如く思ふて居るが、それは社會主義的の考へではなくて、實に私有財産主義の極致とも、私有財産主義の花ともいふべき思想である。そして生産機關の所有も、この生産機關を利用する方法も、徹頭徹尾、個人的である獨立の手工業が、社會の主たる生産方法であつた時代には、其の生産物を私有するといふ私有財産主義は、丁度斯ような經濟生活に當てはまつた正義の觀念を代表する立派な制度だつたのである。

ところが今日ではどうだらう。今日は生産機關の性質が社會的になつて來た。そして此の生産機關を利用して品物を生産する方法も、集會的社會的になつて來た。獨立の手工業者の場合には自分の仕事場で出来上つた品物は、自分の労働の結果であることが、一目瞭然と分つてゐた。そ

れには少しの疑ひを挿む餘地もなく、何人もまた、それに異論を挿みもしなかつた。然るに今日の機械工業の生産品はどうだらう。自分の働いてゐる工場の生産品であるといふことは、決して自分自身の労働の結果であるといふ證據にはならぬ。

【労働全權の原則に基く分配は不可能になつた】早い話が一尺の織物を取つて、之は何人の労働の結果であるかと尋ねたなら、或る輕卒な人は、それは機械工女の労働の産物であると答へるかも知れぬ。之は儘に事實である。しかし僅かに事實の半分である。

それは如何にも、機械工女の労働の結果には相違ない。けれども今一步踏みこんで考へて見ると、其中には赤道直下の太陽の下で、綿畑に働く印度の労働者の労働が含まれて居る。この綿を日本に持つて來る爲めには、船渠人夫と船員との労働が含まれて居る。この綿を紡ぐ爲めには、幾千萬の憐む可き紡績工女——僅か十四か十五の歳に、誘拐同様にして買ひ出され、一年か二年の間に一生涯の健康を消耗し盡されて、巷に放り出されるこの悲惨な人間の犠牲が含まれて居る。

更にその糸を紡いだ紡績機械は、恐らくは英國のバアミンガムあたりの大工場で、鐵工のハム

マによつて造られたものである。其外にも染色工の労働が含まれて居る。交通労働者の労働が含まれて居る。頭腦労働者の労働も含まれて居る。更に其外にも、地底幾百尺の眞暗闇に神甕を振ふ炭坑夫の労働も含まれて居る——。

そこで此の一片れの布ぎれを指して、之は正しく、自分の労働の産物であると断言し得るものがあるであらうか。若し是等の色々様々な種類と部門の労働者の總てを集めて、諸君は各々、此の布ぎれのうちから、當然自分の所有に属すと信ずる部分を取つてゆけと云つたなら、どうだらう。恐らく何人も、其の糸の一筋すらも、之は自分の労働の産物であるから、當然、自分のものだと主張し得るものは無いだらう。人は各々自分の労働の結果を所有するといふことが、私有財産主義の基礎であり理由であつた。然るに此の布ぎれの場合には、この根本の基礎が、全く無くなつて居るからである。

「私有財産制度はくわつて来た」要するに此の僅かの布ぎれも、是等の全ての労働者の集合的の産物であつて、集合的に所有する外ないものである。然るに若し其内の、力の強い一人が、之は自分の私有財産であると云つて、此の布ぎれを奪つて行つたなら、之は明らかに此の場合の正義

の觀念に反して居る。即ち其の品物は、集合的社會的に生産せられたといふ生産状態に適合して生れた正義の觀念に反して居る。直接その品物の生産に携はつた労働者ですら其通りであつて見れば、萬一、その生産に直接に携はらず、又は全然携はらぬ人——例へば資本家——が来て、其の品物を自分の私有物として持つて行つたなら、之は疑ひを挿む餘地のないほどに明々白々な、正義の蹂躪であつたらう。

之は平凡な當り前の事柄のようであつて、實は極めて重大な問題である。何故ならば、私有財産主義の土臺がぐらつて来たことを意味して居るからである。

そこで今度は、斯ような新しい生産方法に基いた新しい正義の觀念に當てはまつた、新しい財産制度を要求する思想が現れて來ることになる。

前にも云つた通り、私有財産主義といふ財産制度は、生産が個人主義的であつた時代には、正さしく正義の觀念を代表した制度であつた。即ち私有財産主義は、宙ぶらりの觀念ではなくて、其下には個人主義的生産といふ、しつかりした活きた事實——經濟上の事實——の基礎があつたそれ故にこそ、私有財産制度は發達し、確立したのであつた。この私有財産制度といふ外殼のう

ちで、人間の生産力は大に増進した。そして生産力が増進するに従つて、生産の方法は愈々益々集会的、社会的になつて来た。

然るに生産が社会的になつて来た結果は、私有財産主義といふ制度の足の下から、何時の間にか活きたる事實——経済上の事實——といふ基礎が消えてしまつたのである。そして私有財産主義といふ觀念は、全く経済上の基礎のない、宙ぶらりの觀念となつてしまつたのである。そこで多くの人々は、私有財産主義といふ制度にも觀念にも、疑ひを挿むようになつて来た。

【國家と私有財産主義】 それのみではなく、近頃は國家なり政府なりが、社會全體の利益の爲め乃至は一部の資本家に對して資本家階級全體の利益を擁護する必要の爲めには、色々の形で、實際私有財産主義に食ひ込んだり、私有財産主義を制限したりして居るが、今日では何人も之を怪しむ者もなければ、大した異論を挿む者もない。假へば米の買占めを罰するとか、商人の小賣相場に干渉するといふようなことも、明かに、私有財産主義に制限を加へたものに外なはらぬ。そこで斯ういふ方面からも、私有財産主義の神聖は、大に疑はれたと云ふことが分る。

【新しい正義の觀念】 斯くて資本主義の經濟制度では、この私有財産主義といふ外殼と、この外

殼のうちで成長した新しい生産力とが、互ひに矛盾し衝突して居るのである。そして其の結果として、舊るい經濟上の事實に基いた正義の觀念、この觀念に基いた財産の關係と財産制度と、新しい經濟上の事實、この事實を反映した正義の觀念とが、互ひに對立することゝなつた。今日世界各國の勞働運動と無産階級運動の底に流れてゐる力強よい要求は、要するに新しい經濟關係から生まれた新しい正義の觀念に適合するような、新しい財産關係を要求する聲であつて、この要求の背後には、斯ような事實が潜んで居るのである。それは單純に頭の中で拵らへ上げた思想ではなくて、この思想の上の變化には、事實の上の變化が先立つて居るのである。

## (十一) 社會生活の危険と不安

【資本制度の下に於ける生産の動機】 前にも述べた通り、最もよい經濟組織とは、社會の全員を最も有効に、また最も經濟的に養つてゆく制度である。ところが資本制度の下では、生産の目的は一個人の利得であつて、その偶然の結果として、社會の全員が衣食を得て居るに過ぎぬ。さきに

も引用した福田徳三博士の名著のうちにも、斯う書いてある。

「今日の生活に於ては、企業を離れて生産を考へることは殆ど不可能であります……。企業の生産に於ける意義は、土地、資本、労働とは著るしく違ひます。單に一の要素とか要件とか、云ふべきものではありません。抑も生産の起る根本の動力は企業にありまして、他の要素は企業あつて始めて意味を生ずるものであります。」

「民衆の生活はその偶然の結果」企業といふことは、利潤の取得を目的とする生産に外ならぬ。そこで資本主義の経済制度では、生産を行ふ動機も目的も利潤であつて、社會の全員をより善く養ふといふことではないのである。言葉を換へて云へば、人民の多數が飢えて居ても、これに食物を供給しなければならぬと云ふだけのことでは、生産は行はれぬ。また多くの人民が凍へて居つても、之に着物を供給するといふことは、今日の生産の目的とはならぬ。更にまた、社會の進歩と幸福との爲めに、大きな貢献をする才能を持つて生まれた青年が、たゞ貧乏な家庭に生まれたといふ偶然の出来事の爲めに、その才能を開発せしめる教育の機会を與へられないで、無残に萎れて終つて居つても、この青年を養ふと云ふことは、決して今日の生産の目的ではないのである。

「生産の目的に適つた行動」そこで國民の多數は飢えて居つても、「引合はぬ」以上は、生産は行はれぬ。否な折角輸入した小麦をも、海中に棄てねばならぬように、折角運轉してゐる工場をも閉鎖したり、操業をも短縮する必要がある——今日の生産の行はれる動機と目的から見れば、正さに其の必要があるのである。

或る人は斯ような行動を見て、暴利だとか奸商だとか騒いでゐる。しかし今日の社會では、生産の目的は個人の營利である。個人の營利企業といふ生産の目的から見れば、斯ような行動は、誠によく其の目的に適つた、正しい行動であると云はなければならぬ。そこで、今日の經濟制度そのものを是認して置きながら、暴利だとか奸商だとか騒ぐのは、抑矛盾の甚だしいものである。

「危險の自覺」斯ように今日の世の中では、生産の目的は社會の全員を養ふことではなくて、一個人の營利である。そして社會の全員が、兎も角も生きて暮らしてゐるのは、その偶然の結果に外ならぬ。社會の全體の生存が、利潤獲得者の氣紛ぐれに懸つてゐるとしたならば、之は如何にも危險なことであつて、高い崖の上から、一本の麻繩で、鍋の眞中に吊り下げられてゐるより

も、尙ほ危険である。一二年前から「自覚」とか、「覺醒」とかいふ言葉が流行語となつた。青年は自覚せよといふ。労働者は自覚せよといふ。一體何を自覚するのであらうか。よし全ての事に目醒めても、この危険に目覚めて居らぬ人の自覚は、要するに夢心地のうちに見てゐる幻覺に外ならぬ。

### (十二) 生活の改造

【思想の動搖】 この危険を明らかに自覚したものは少ないかも知らぬ。しかしこの危険と、それから来る脅威とを、無意識的に乃至は半意識的に感じて居らぬ人は、殆んど一人も無い。今日の世の中は、この無意識乃至は半意識の働きから起る色々の事實で満ちてゐる。そして現代の労働者、無産階級の解放運動は、この危険に對する明白な自覚から起つたものであつて、一般の思想の動搖と社會的不安とは、この危険に對する無意識的乃至は半意識的の反應に外ならぬ。

【より善き生活への憧憬】 そこで斯のような經濟生活の上の不安定は、多くの人々の頭には、唯だ

漠然とした、より良き生活への憧憬となつて映つてゐる。軀のどこかに調子の違つた箇所があるしかし痛みの箇所が愈々どこであるかは分らない。その原因が何であるかは尙さら分らない。けれども兎も角も、もつと健康な幸福な状態がありさうに思はれる。そして之を求め、漠然ながらも、止みがたい要求がある。之が多數の人々の心理状態である。彼等は進むべき方向と目標とを、はつきりと意識して居らぬ。然し新しい生活を求める強い要求は、現代の著るしい特徴であると云つてよい。

【生活改造の二方法】 然しながら人間の生活を改造する方法は、究極は二つしかない。即ち一つは、自分を改造することであつて、今一つは、自分の生活する條件を改造することである。言葉を換へて云へば、個體としての、一個人としての人間を變へるか、それとも、この一個人が集まつてする生活の仕組みを變へるかといふことである。

この二つの道の何れが正しいかといふことは、現代生活の悩みが、何處に原因してゐるかといふことで決定する。若し今日の社會生活の不満と缺點とが、人間に目が三つないとか、手が八本無いとかいふような、生理的原因に基づいて居るならば、勢ひ生活を改造する爲めには、個體

としての人間を變へてゆく外には仕方がない。けれども若しそれが、生理的原因ではなくて、社會的原因に基づいてゐるとしたならば、社會生活の改造を離れた個人の改造といふことは、畢竟無意義である。

「個人の改造か社會の改造か」 自己の改造、自己の革命といふことは、二千年も、もつと前から、云ひ續けられ、叫び續けられて來た。しかし今日に至るまで、個體としての人間、生物としての人間には、大なる變化も、革命も起つた跡方がない。之に反して個體としての人間が集まつてする共同生活の條件、社會の組織と仕組との上には、幾度か大なる變革があつた。そしてこの變革によつて、幾度びか人間の生活は、根本から革命されたのである。

### (十三) 自己改造の努力

「現状適應の人生觀」 吾々の生活を改造する道は、個人を改造するにあるとしたならば、吾々は事實上、生活を改造する望みを擲うたねばならぬ。若し吾々に目が三つない爲めに、耳が四つな

い爲めに、乃至は吾々が第六の感覺器や第七の感覺器を持たぬ爲めに、この地上の生活が、今日の如く悲惨と不合理とに満たされて居るものだとしたならば、吾々は目を瞑ちて此の運命に忍従する外はない。今日の社會生活の悲惨と不合理とは、生物としての人間が不完全な爲めである——例へば吾々に盲腸がある爲に、度々腹が痛むのと同じように、吾々が一人々々の人間として不完全な爲めである——としたならば、之は勿論、資本制度の罪でもなければ、資本家階級の罪でもない。そこで現在の制度と秩序との擁護を利益とする階級、又はこの階級の心理に感染した人々は、現在の生活の悲惨と不合理とを、社會的原因から來る社會的の現象とは見ないで、成るべく日蝕や月蝕と同じ自然現象として了はうとするのである。

「哲學と科學は回轉の手段」 資本制度の社會に於ける悲惨と不合理とを、盲腸や蟲歯や、乃至は地震や大風と同じものに見て、目を瞑ちて運命に忍従する人々よりも、幾らか氣概と勇氣のある人々——乃至は、運命に忍従するだけの決斷と勇氣の無い人々——は、兎も角も、自分自身を改造しようとして努力する。彼等はこの資本主義の社會組織の眞中に、只だ自分獨りの住む清らかな世界——乃至は蝸牛の殻——を建てようとして努力する。



然しながら、黄金の神が萬能の神であるように、資本主義の組織は、現在の組織である。神の知らざる處なきように、現在の社會には、資本主義のいまさざる處はない。資本主義は離れくゝの出來事ではなくて、全てのものを包む一つの組織網である。現在の社會生活の最も小ひさな出來事の一つと雖も、全てこの網の目から逃れることは出來ぬ。或人は哲學に逃れようとする。或人は文藝に逃がれようとする。また或人は「新しい村」に逃がれようとする。そして現に或人は、巧みに逃れ得たかのように信じてゐる。そしてその哲學も、その文藝も、その「新しい村」も、實はこの大きな資本主義網の一と目であることを覺らない。

【哲學的思辨は資本主義に順應する努力】　そこで内觀的哲學的の思索によつて問題を解決しようとしたり、問題が解決されるように思ふのは、問題の解決ではなくて、實は問題の回避である。彼等は哲學的に片附けば、それで問題そのものが片附いたと思ふて居る。彼等は實際生活の問題を解決しようとして出發したことは忘れてしまつて、唯だ頭の中の安價な解決で満足する。彼等は成るほど「哲學」を解決したかも知れぬが、少しも「生活」を解決せぬ。そこで現在の社會生活を其儘にして置いて、唯だ冬至南瓜ほどの自分の頭の中で、問題の解決を求めるのは、畢竟するに、

現在の社會生活を肯定し是認する理屈と口實とを發見しようとする努力に歸着するものである。斯ような解決や斯ような努力は、まぶしいものに對して目を閉ぢたと云ふだけのことである。險の外には依然としてまぶしい光が照り輝いてゐる。それはまぶしい物をなくしたのではなくて、我慢の仕方を工夫しただけである。それは資本主義の生活を改造したのではない。資本主義の生活から逃がれ出たのでもない。唯だ自分の生活を資本主義に順應させただけである。

社會生活とは人と人との關係であつて、決して吾々の頭の中に仕舞つてあるものではない。吾々は考へねばならぬ。しかし、目を瞑つて考へないで、大きく目を明けて考へねばならぬ。思索や、瞑想や、哲學や、宗教によつて問題を解決しようとして、唯だ徒らに、干からびた小さな南瓜の様な自分の頭の中をつゝき廻して居る人々は、資本主義の經濟組織といふまぶしい事實に目を開く勇氣のない人であつて、其の結果は、いつでも問題の解決ではなくて回避である。

「理想生活のまゝのこと」　之よりも少し正直な人々、乃至はもう少し空想的な人々は、少數の間を集めて、兎も角も理想的な共同生活をして見ようとする。五六十年前に米國あたりで一時流行した「理想村」や「新しい村」の試み——理想生活のまゝのこと——は即ちそれである。是等の人々

は、問題の解決を頭の中のみ求めないで、他人と共同の生活の上に求めようとする。此の點に於ては、儘に一歩を進めたものである。即ち是等の人々は、自分一人の哲學的理解や、腹の蟲のおきどころによつて問題が解決するのではなくて、他人との共同生活——即ち社會生活——の上の關係と形體——即ち社會組織——を改めることに依つてのみ、初めて問題は解決されるのだといふことを、暗に承認して居るのである。

【片目を明けて見た社會觀】 然しこの人々も亦た、僅に片眼を明けて見たこれだけの事實を、もつと凝視して、はつきりと見極はめようとはせぬ。否な彼等は、はつきりと見ることの危険を無意識に感じてゐる。そこで彼等一面には、新しい生活の要件は、共同生活の上の關係——社會組織——の變更にあることを半無意識に承認しておきながら、實際にやることは、現在の社會組織には少しも手を觸れないで、唯だその中に、理想的の一小區劃を造らうとするだけである。それが如何に堅固な外廓を回らした城塞であらうとも、同じく資本主義王國の版圖の上にあるものであつて、城廓の外と同じほど、資本主義の法則に支配されて居るものだといふことに気がつかない。そこで、斯ような努力は、斯ような努力の無益を知らしめることの外には、少しの社會的

價値もない。それは一晩ウキスキーに酔つて、資本主義以外の天地を逍遙してゐるような氣持になつたのと同じほど無意義であり、そしてそれ以上に有害である。

#### (十四) 社會の改造

【經濟組織の改造は可能か】 社會生活を改造する今一つの方法は、自分を改造する代りに、自分の生活する條件を改造することである。即ち社會生活の組織と仕組みを變へることである。然るに吾々の社會組織の基礎根本となつて居るものは、經濟組織である。そこで吾々の社會生活、即ち生活の條件を改造するといふことは、詰りは社會の經濟組織を改造するといふことになる。

然しながら、經濟組織の改造と云ふことは、空想家の空想であつて、とても不可能である！成るほど資本主義の經濟組織には、色々の不合理と缺點がある。しかし吾々の両親も、此の制度の裡に生まれて、此の制度の裡に死んだではないか！吾々の祖父も、吾々の曾祖父も、同じく

此の制度の裡に生まれて、此の制度の裡に死んだのではないか！ と斯う云ふ人がある。云ふばかりでなく、ほんとにそう信じて居る人もある。

【絲車と紡績機械】 私は或る時田舎に歸つて、物置のガラクタの中に、眞黒になつた絲車の轉がつてゐるのを見た。今から三十年前、私の子供の時分には、大抵の家には、必ずこの絲車が一挺づゝはあつたものである。絲車で絲を紡ぐ彼のねむさうな音は、まだ多くの人々の記憶に残つてゐるに相違ない。ところが三十年後の今日はどうだらう。どんな田舎に行つても、絲車は最早や物置の隅にさへ滅多に見ることが出来ぬ。

然しながら三十年前に、絲車を廻してゐるお婆さんに、三十年後にはこの絲車が紡績機械に變はると云つたなら、恐らく一笑に附したに違ひない。ところが今日吾々の着てゐる綿布は、悉く紡績機械によつて生産されたものである。そして何人も此の變化を怪しむ者がない。

【お婆さんは絲車の永久性を信じてゐた】 斯ように三十年前のお婆さんは、絲車は未來永劫。人間が絲を生産する唯一の方法であると思ひ込んでゐた。そして若しこの絲車をこわしたなら、人間は最早や、絲を造ることは出来ぬと信じてゐた。ところが今日では、この絲車は、五百年千年前

の珍奇な品物と同じように、博物館に陳列されるものとなつたのである。

絲車と紡績機械、之は大なる變化である。然しよく考へて見ると、此の變化には、まだ大なる意義のある變化が含まれてゐる。

【紡績機械は社會組織を一變した】 絲車で絲を紡いでゐる時代には、めい／＼の家庭に絲車があつて、家庭の一員が畑から取入れた綿を絲に紡ぐ。そして其の絲は娘が手織木綿に織つて一家族の使用に供する。斯うに絲が生産せられて消費されるまで、全ての過程が、一族の内部で行はれて居つたものである。ところが紡績機械の時代になると、事情は一變する。紡績機械の場合には、第一に紡績機械や、工場や、原料の綿花を所有する資本家がある。第二には是等の資本家に勞働力を買はれて働く男女の勞働者がある。第三には此の絲を買つて使ふ消費者がある。そして絲が生産せられて、消費者の手に渡るまでには、色々の種類の商人がある。仲買人がある。卸商人がある。小賣商人がある。銀行家がある。そして是等の人々が絲の生産にどういふ關係を持つてゐるか云ふことで、人々の間に社會的階級が分かれて来る。そして絲車の場合には、出来上つた絲は全部その家族の所有に歸したが、紡績の場合には、出来上つた絲は、之を生産した勞

勤者が全部自分の物とする譯ではない。否な労働者は賃銀として、僅かに其の一小部分を受け取るだけであつて、資本家は其の内から資本の利息と企業に對する報酬を取る、會社の車役は賞與金を取る。事務員は月給を取る、商人は其の内から商業の利得を取るといふあんばいに、絲は其儘には分配せられぬが、貨幣に形を代へて色々の階級の人々の間に分配される。即ちここに分配の問題が起つて来る。この分配に關聯して賃銀問題が起り、労働問題が起つて来る。

斯ように絲車が紡績機械になつたと云ふことは、單に絲を生産する生産技術の上の變化であるが、生産技術の變化の結果は、經濟組織、社會組織の上に變化を生じて来る。即ち生活の資料を生産し、分配し、消費するまでの道行きと仕組みとがすつかり變つて来る。そして之に従つて今まで無かつた色々の社會的階級の分裂や對立が出来、今まで無かつた色々の問題が起り、今まで無かつた色々の社會現象が起つて来る。即ち社會の經濟上の組織、組立てが全く一變するのである。多くの人々は、絲車から紡績機械への變化を見て、少しも怪しまぬ。けれどもこの變化に伴つて、實は經濟の組織、社會の組立てといふものは、根底から一變されたのである。

〔經濟制度は變化する〕 既に絲車の經濟制度が變化した以上は、紡績機械の經濟制度が變化したとて不思議はない。今日の資本主義の經濟組織が永久不變であると思ふのは、丁度三十年前に、お婆さんが絲車の永久不變を信じたのと同じことである。そして現在の經濟の組織、現在の社會生活の組立てが倒れたなら、人間は最早や生活できぬかのように思ふのは、絲車が無くなれば、最早や人間は絲を紡ぐことが出来なくなると思ふてゐたのと同じことである。

### (十五) 闘争の生活

〔正義は變化する〕 吾々は今日の社會生活には、幾多の不合理のあることを見た。幾多の缺點と弊害とのあることを見た。それは最早や、吾々の正義の觀念を満足させることが出来ないことを見た。

如何なる時代の人間でも、正義の觀念をもつて居る。正義の觀念をもつて居ることは、千年前の人間と今日の人間とは少しも變りはない。しかし何を正義とするかといふ、正義の觀念の内容實質は變化する。唯だに變化するばかりでなく、時には全く、正反對になつて来る。五十年前に

正義に反してゐた事が、今日は正義の觀念に當てはまることになる。それと同じく百年前の正義であつて、今日では吾々の正義の觀念が到底許すべからざるものが幾つもある。

【正義は生活の條件と共に變化する】 斯うに正義の觀念の内容實質が變化するのは、最後まで推つめて考へると、吾々が如何にして生存をするかといふ、社會生活の仕方が變つたからである。吾々の正義とは、畢竟するに、より善く生活することである。一人々々がより善く生活するといふことではなくて、社會全體がより善く生活することである。之が吾々の正義の要求であつて、之に反したものは吾々の正義の觀念に反したものとなる。そこで如何にしてより善く生活できるかといふ事情が變つて來れば、勢ひ吾々の正義の觀念の、内容實質も變つて來る。

【支那階級の正義と被支配者の正義】 従つて一つの社會が全く利害の相反する二つの階級に分裂すると、勢ひ其の社會には、二つの異つた正義の觀念が出來上ることになる。

或る經濟の組織——假へば資本制度——が、まだ進歩し成長をしてゐる新しい經濟の制度であり、新しい生産力を代表して居つた時代には、資本制度の經濟は、まだ可なり有効に、社會全體を給養するだけの力を持つてゐた。此の時代にも、社會は勿論利害の相反した二つの階級——

搾取者の階級と被搾取者の階級——即ち支配階級と被支配階級とに分れては居つたが、二つの階級の間の對立と矛盾とが、まだ其れほど著しくなかつたので、一般に支配階級——現状維持を利益とする階級——の正義の觀念は、被支配階級——現状打破を利益とする階級——の頭を支配して居つたのである。

【新興階級の正義】 ところが此の經濟制度が、最早や上り坂の時代を過ぎ、會ては新しい生産力を代表してゐたのに反して、却て新しい生産力の伸びる障礙となり桎梏となる時代になると、この新しい生産力を代表する新興階級の間には、段々と獨立した正義の觀念が出來上つて來る。假へば同盟罷工の如き行動は、ほんの近頃まで、一般に罪惡視されて居つたにも拘らず、今では之を以て、當然の權利と信するようになった。

斯うなると、利害の相反した二つの階級の間には、各々異つた正義の觀念が相對立することになる。一方の階級の正義の觀念から見れば、現状を維持することは第一の正義である。ところが新しい生産力を代表して、社會の底の方から頭を擡げて居る新興の階級が、やがて階級的に成長し成熟して來ると、最早や舊い制度と秩序とを代表してゐる支配階級の正義の觀念に支配され、

盲従して居ることを肯んじないで、漸次に新興階級に獨特な、獨立した正義の觀念を確立する。そして此の新しい正義の觀念に當て嵌まつた生活をする事の出来るような——即ちより善く生活する事の出来るような——新しい社會生活の組立てを要求するようになる。そこで新しい正義は、舊い正義と衝突する。

人間社會の進歩は、常にこの新しい正義の勝利によつて行はれるものである。何故ならば、新しい正義の觀念は、如何にして社會全體がよりよく生活することが出来るかといふ事實の上に起つて變化するものであり、その新しい方法を代表するものだからである。

「生活は闘ひである」生活は闘ひである。けれども、新しい生活への闘ひは、自分の頭と闘ふ闘ひではなくて、新しい正義の觀念に反した生活を強ふる環境と、この環境を維持して居る色々の勢力とに對する闘ひである。より善き生活への闘ひは、偽瞞と回避とによつて自分を舊るい環境に順應させることではなくて、反對に、如何にして活きるかと云ふ社會生活の有様を、新しい正義の觀念に順應せしめることに外ならぬ。

—終—

大正十二年四月五日印  
大正十二年四月十日發行

資本主義のからくり  
定價三十錢



著者 山川均  
發行者 僚友社

印刷者 尾崎榮太郎  
東京市神田區今川小路一ノ一

印刷所 同工社  
東京市神田區今川小路一ノ一

發行所 東京市外戸塚町上戸塚一六五  
僚友社

振替東京六二六五一番

290  
170

告豫刊近社友儔

高橋貞樹著 水 平 運 動 最近刊

伊井 敬著 革命前の十五年 近刊

伊井 敬著 ニコライ・レーニン 近刊

北原龍雄著 蓆旗を立てるまで 續刊

終

